

## (2) 学園(法人)の運営方針

### はじめに

北星学園は、1887(明治20)年、近代日本の教育制度の揺籃期に誕生し、130年を越える年月を歩み、現在は中学校から大学院にいたる総合学園として、北海道を代表する私立学園の一つに数えられています。しかし、この年月の前半期、特に第二次大戦期は、キリスト教教育のゆえに他私学には見られない苦難を経験し、後半期は日本国憲法と(旧)教育基本法のもと復興と拡充の道に立ったとはいえ、日本全体が経済成長期と呼ばれた時期でさえ、北海道という立地ゆえの不利をまぬかれず、平坦な道ではありませんでした。しかし、学園関係者の祈りと働きにより、また国内外の学園を思う方々の祈りと支援により現在の学園が築かれてきました。この間、学園では絶えず創立の精神を確認し学園運営を進めてきましたが、敗戦50年に当たる1995年には学園として「北星学園平和宣言」を発表、また大学では、2004年、建学の精神の基本理念を明確化するために『建学の精神』の基本理念と「北星学園大学ミッション・ステートメント」を定めました。大学の表明文書は、その内容において、学園内他校の姿勢とも通底するものです。そして2015年には、学園として「戦後70年にあたって」を表明、その中で「北星学園平和宣言」を再確認しました。いずれも教育機関たる本学がよって立つ位置を宣明するものです。これらの歴史を絶えず想起し、これからの日々も、上よりの導きと支えを祈りつつ、神に良しとされる学園作りに邁進したいと思えます。

現在、日本の教育界はかつて経験したことのない課題に直面しています。ひとつは少子化による就学人口の急減です。政府の発表によれば、2019年の推計出生数は86.4万人。実は、この数字は2021年に起こると予想されていたものでしたが、それが2年も早く到来したのです。加速度的な変化です。この数字は12年後の中学入学者数に、15年後の高校入学者数に、18年後の大学入学者数に影響が出ることは必至です。公立校の場合、既に学校間の統廃合が進んでおり、暫定的な形態とはいえ幕別青陵高校のように道立校と私立校間での「統合」(2019年4月)というケースさえ出ています。(人口減に今のところ直接には関係しませんが、大学レベルでは、2020年1月の広島大学と桜美林大学間のパートナーシップ協定のように公・私を設置形態を越えた協力協定が結ばれる時代です)。もうひとつの課題は、IT技術の急速な発達による知識伝達の方法の変化です。教育方法や教室や学校の在り方にさえ影響を与え始めています。ふたつとも大きな課題です。学園構成員全員が、大状況の中で生じているこうした課題をしっかりと認識し、歩むべき道を確認することが求められます。

今年度の学園目標と年間聖句は、宗教主任会議からの提案に基づき、次のように決めました。

**学園目標：ふたたび希望に活かされて**

**年間聖句：希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい**

(ローマの信徒への手紙 12章12節)

著者パウロが苦難という語を使うとき、一般的な困難ではなく、キリストと関わる困難を指しているといわれます。キリスト教の精神によって立つ北星学園には、独自の困難があるかもしれませんが、この言葉の大切な勧めを胸に歩んでまいりましょう。

### 1. 「建学の精神」に基づく教育の現代化について

従来、各年度の学園運営方針の中では、この表題のもとで当該年度の、あるいは近未来に想定される特徴的課題に対応する「現代化」の在り方を確認してきましたが、今年度は後述する「学校法人北星学園 中長期計画～グランドデザイン 2020-2040～」の第1年にあたり、その枠の中での検討課題となります。しかし、各校の「待ったなし」の課題は、学園と連絡を取りながら、また「グランドデザイン(中長期計画)」の検討・進捗状況と齟齬をきたさない姿勢で取り組むことを要請します。

スミス先生個人の学校から始まった北星学園が、10年を経ない段階で教育内容が東京の女学校よりも高いと評価されたのは、スミス先生自身と彼女を助けた札幌農学校教授陣による広い視野に立つ「現代化」協力があつたからと考えられます。スミス先生を継いだモンク先生時代の教育内容の高度化という「現代化」は、当時としては稀有な彼女の教育研究体験があつたと考えられます。もちろん、戦後学園が拡大し現在に至るまでにも様々な「現代化」が、学園レベルで各校レベルでありました。しかし、「はじめに」で指摘した現在の事態には、今までの成功体験が役に立たないといつても過言ではありません。ここ数年の学園研修会記録（それぞれその時点での近未来に触れている）の再読や「グランドデザイン（中長期計画）」の検討に、構成員全員が関心をもつことを期待します。

## 2. 総合学園としてのより緊密な連携を

かつての学園は規模が小さく、学園学校会議、学園キリスト教教育研究所、さらに教職員組合など、全学園的な組織や委員会が稼働し、教職員の人事異動や交流が活発に行われていました。学園はいわゆる「顔の見える」職場でしたが、現在は生徒・学生数の増加や時代の要求もあって、大学の学部・学科再編と新設などにより教職員数も膨れ上がりました。それに伴って取組む課題が多様化し、複雑になっています。

こうした交流や連携活動の希薄化に対して、今、中等教育部門と高等教育部門の教育実践の連携や人的交流の推進が求められています。昨年来、「グランドデザイン（中長期計画）」の策定作業に取り組んできましたが、学園内教育連携委員会の意向を基に、以下の内容について2020年度から取組みを始めます。

第1には、一貫教育の推進として、情報教育（特にプログラミング教育）の推進、「中高大間の一貫校コース」の設置、英語・聖書・社会科などの授業における統一テーマの設定と教材の共有や講師の派遣、「平和学」の推進、各校間の留学生の交流、大学のピア・サポートやインクルーシブ教育の高校での実践、中高で培った課外活動の能力を大学でも継続し充実させるための計画、などです。

なお、上記の一貫教育としての英語や情報教育の設備等、環境整備のために常設委員会を設置して検討を進めます。

第2には、学園内推薦入学制度の充実（学費免除、減免の検討）、各校の授業や特別プログラム（商品開発、クリスマス行事、学校祭、体育祭など）の参加や見学による教職員、学生・生徒間の交流を図ります。

第3には、毎年開催の学園教職員研修会の内容をさらに充実させます。

第4には、これまでの中等教育部門に割当てていた政策予備費を廃止し、学校評価、研修制度、広報活動、高大連携等の取組・充実に対応する予算措置の検討に入ります。

## 3. キリスト教に基づく教育の推進について

学園は建学の精神を具体化し、キリスト教に基づく教育（以下「キリスト教教育」という）の推進を目標としています。そのため、学園の教職員がキリスト教教育活動に積極的に関わり、協力できるように配慮していきます。

特に学園と宗教主任会議との連携を強化し、学園内のキリスト教教育の課題の解決や推進に努めます。9年目を迎える学園キリスト教センターは運営委員会を中心に、これまでの活動を総括し、上記目標の実現のための具体化に取組み、キリスト教教育活動の推進に努めます。

また、キリスト教教育活動の積極的な担い手となる教職員の配置の必要があり、各校の責任者に働きかけます。

具体的には以下の事柄に取組みます。

- ① 手薄になっているチャプレン・宗教主任の適正配置
- ② キリスト教教育を推進するための礼拝堂など、施設設備の整備

- ③ 『北星学園とキリスト教』、『Shine like stars in a dark world』、北星学園創立130周年記念誌『サラ・スミスと女性宣教師 ―北星学園を築いた人々―』等の刊行物を用いた、創設者たちの教育精神を伝える活動
- ④ センター報『北星教育』、年報『北星教育と現代』、資料集『ライラック』の継続刊行等による、学内外への本学園のキリスト教教育活動の発信
- ⑤ 学園内推薦入学者の集いのさらなる充実
- ⑥ 各校のキリスト教教育活動の委員会、祈りの会などの充実
- ⑦ 学園のキリスト教教育関係の資料の収集と整理

全体としては、キリスト教学校としての学園を社会にアピールすること、すなわち広報活動を進めていきます。また、学園キリスト教センターの存在と活動が学内外に周知されるよう努めるとともに、各校のキリスト教活動を積極的に支援していきます。

#### 4. 学校法人北星学園中長期計画（グランドデザイン2020 - 2040）について

- (1) 学園(法人)の中長期計画で述べたとおりです。

以 上